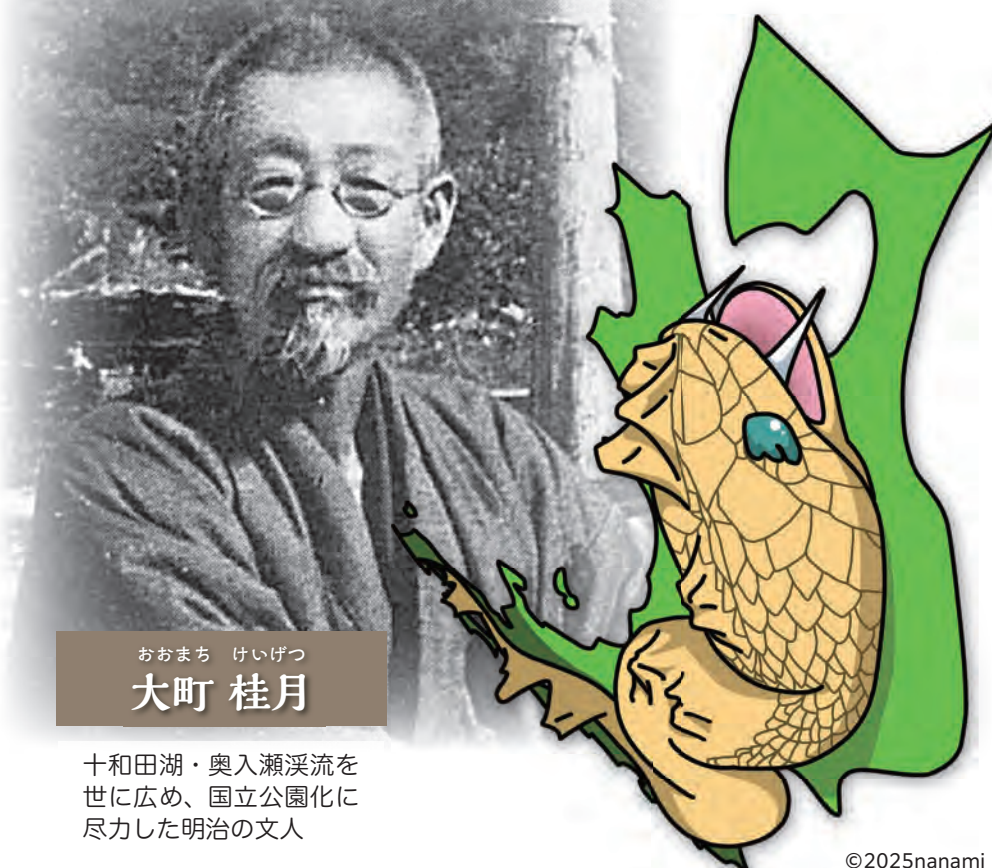


～大町桂月没後100年記念～

十和田を広く世に紹介した 「奥羽一周記」 現代文訳マップ 明治の文人大町桂月の18日間の紀行文



おまち けいげつ
大町 桂月

十和田湖・奥入瀬渓流を
世に広め、国立公園化に
尽力した明治の文人

©2025nanami

奥羽一周記 全ルート

1 2 ～ 第1章 五戸(序章より) ～

本州の北端には八甲田山が高くそびえたちその山頂は南に延びて南部と津軽に分かれさらに南下して東海道と北陸に分かれなおさらに西に曲がり、山陽道と山陰道に分かれる。長さ数百里、大蛇のようである。中里山はその尾、甲斐の群山はその腹、八甲田山はその頭、頭目自り、その目は三里四方、我が国の山道では最も大いなる十和田湖である。

鹿谷部春汀「しばしば十和田湖に遊び、天下の絶景と思っている。しかし、他の勝地を知らないことには一人点かかもしれない。比較のため、華嚴の滝や中津寺湖を見てきた。我が十和田湖はこれに勝るとも劣らないと確信した。十和田湖を見に来てほしい。」桂月「いわゆる下地は好きなり。」喜び勇んでこれに応じた。

70 ～ 第15章 十和田湖の特色(終章より) ～

8月26日東京を出発
9月11日大館より東京の途に就く。18日間の旅である。旅の目的地は、十和田湖の湖(しゅう)を探索すること、ここに十和田湖の優れた景色の主要を上げる。

「山道」として最も偉大なること一也。
奥入瀬の深流の幽静(ゆうせい)天下無比なること、二也。
湖の周囲の山に樹がしげる様は他に比べようがないこと、三也。
紅葉の美、四也。
中湖(なかのうみ)の断崖は高く、水が深いこと、他に比べようがないこと、五也。
湖やみはみな若で、私が生きていること、六也。
奥入瀬の本流を流す量も高いのは松尾の滝、広いのは鏡子大滝を始めとし見るべき滝が多いこと、滝が多いといわれる日光、塩原などと比較にならないこと、七也。
その他、白根神社(しろねじんじゃ)の滝、霊山(れいざん)の千手窟、御門石、墓石(たみいし)、墓石、雅俗(がふく)それぞれに趣があり、十和田湖は、風光の衆美を一つに集めた天下有数の勝地也。

私は、十和田湖への4通りの道を通った。
小坂よりの路、毛馬内よりの路を通れば、湖の一部を俯瞰できる。十和田湖から奥入瀬渓流を取れば十和田湖の風光は半分を失う。かつ、三本木より奥入瀬渓流を通る路はもとも平坦。

私は世の山川を愛する人たちに言いたい。
必ず行って十和田湖を見よ。
往(い)きか、帰(か)りかには必ず奥入瀬渓流を過ぎよ。
同じ道を往復するのを好まない人は小坂か毛馬内かどちらを選ぶにしても大きな違いはない。
大館から小坂銅山まで軽便電車が近いところに通ると聞く。小坂から十和田湖までおよそ4里だ。
今後この利用により、小坂より登山に来る人が増え、ただ休屋付近を見て、奥入瀬の景勝をなさざりける人も多くなるだろう。残念なことである。
この後の旅行(ゆこう)のくわいこと、別に稿(こう)を記し、巻(まき)の(ひやくすい)の巻を添えて、一冊とした。ここには、ただ大要を略記する。
終(しまい)にあたり、私を十和田湖に導いてくれた春汀に感謝し、併せて、私にいろいろの好意を寄せくれた三戸郡、上北郡の方々に感謝したい。



「奥羽一周記」が掲載された「太陽」

大町桂月は、1869年明治2年、高知市に生まれました。本名は芳衛。月の名所として名高い郷里桂月の月を想い、「桂月」を号としました。
1908年8月下旬、五戸町出身で当時人物評論では第一人者と評価の高かった雑誌「太陽」の編集長鳥谷部春汀に誘われ、十和田湖、奥入瀬を清遊。精力的に探勝し、魅せられた桂月は、9月中旬に帰京後18日間の行程を紀行文「奥羽一周記」にまとめ、翌月の「太陽」に発表。「十和田湖の勝景は山湖として最も偉大。奥入瀬の深流の幽静、天下無比」と称え、後の大正天皇から、全国知事会に出席した青森県知事武田千代三郎に十和田湖について御下問があったほど、『奥羽一周記』によって、十和田湖、奥入瀬渓流は広く世に知られることになりました。

御下問を受けた青森県知事武田千代三郎は、その後、十和田湖を訪れ、その美しさを目にし、すぐさま「十和田勝論」を発表。「一本加ふべからず、一本除くべからず、一石動かすべからず」の理念は今に引き継がれています。著書「十和田湖」は日本最初のガイドブックと言われています。また、武田知事は地元十和田村長で青森県議会議員の小笠原耕一とともに十和田観光開発に力を入れました。小笠原耕一村長の依頼で桂月が起草した「十和田湖を中心とする国立公園設置に関する請願」は、国立公園指定の原動力となりました。国立公園指定15周年の記念として三氏の功績を称える顕彰碑が高村光太郎の手によって造られ、「乙女の像」として多くの人に親しまれています。

このマップは、明治41年8月26日に東京を発ち、9月12日に東京に帰着するまでの18日間の記録である「奥羽一周記」の現代文訳を元に、訪問地、期日、奥羽一周記に記載された内容の抜粋、を資料的視点で整理し、作成したものです。



大町桂月 HP
<http://keigetsu1869.la.coocan.jp/>
マップは左記のホームページでも
ごらんいただけます。



冬の「乙女の像」

五戸・十和田・八戸 2～4日目 11～12日目

注:道路、線路等は現在の情報です。(全国共通)

【11日目:明治41年9月5日】
法興沢村

途中、法興沢村の有志が路で待ち、一事に招いて酒を肴(さかな)めた。
小笠原耕一村長、鈴木敏夫氏、中山留五郎氏、相澤寧(やすし)氏、小笠原松次郎氏、太田寛三氏、鈴木友記氏、東長五郎氏、生徒数人が道で待ち受け。
相澤氏は医者で俳句を作り、晩村と号し日本派の俳人。
歓迎の句をいただく。
珍しいこと、今まではいたところであられるのみ、受けたのはこれが初めて。

【11日目:明治41年9月5日】
一心亭

一心亭で開催の三本木有志者の歓迎会に行く。
堺三木人氏、川崎新兵衛氏、若館精英氏、大島市太郎氏の4人が発起人。
畜産学校校長・高尾角次郎氏
〃 其の教員・佐藤、木場、板佐、佐藤、久根(ひさたけ)諸氏
開聖会社社長・杉山虎己氏
〃 其の社員・戸蔵親氏
その他 土屋氏、浪岡喜代松氏ほか。
百穂、桂月、三浦道太郎氏、江渡省三氏、太田吉司氏も加わり20人ほどが集まった。
女中のほか、2、3人の芸奴。
若館氏「歓迎の詞ことば
桂月…答辞
久根氏は同郷の人。第一高等学校時代の学友。
20年ぶりに会う。

【4日目:明治41年8月29日】
戸来村(現新郷村) 小坂学校

戸来村に到着。
小坂甚徳氏、小坂甫三氏、見瀬源衛氏、道で待ち受けていた。
小坂学校にて酒宴をいただく。求めに応じて揮毫する。
3時間ほど休憩。

【4日目:明治41年8月29日】
牛の首峠(うしのくびとげ)

牛の首峠を通る頃氏が暮れる。
提灯と藤の皮の松明で道を照らす。

【11日目:明治41年9月5日】
三本木 安野旅館

馬車で三本木に到着。
春汀と6日ぶりに会う。
同行する予定だった長谷川天漢の子の病児の報に接する。
三本木 安野旅館泊

【12日目:明治41年9月6日】
太素塚

畜産事務所そばに太素塚あり。
偉人新渡戸博が葬られているところ。
左に小倉(しょうが)ん、…私などを祭るために作られた小さくなほみがあり、十次郎の霊を祀っている。
墓の後ろは芝生が広く、眺望が開けている。ここを瀬戸山という。
東は名久井岳、北は恐山一群の山を臨む。
東は海に連なり、尽くるところを知らず。
西は八甲田より十和田山に続く一連の連山。
この後は芝に隠れていた。
近くには三本木野、世に名だたる牧場であり、万馬は秋肥えて千里の長風に嘶(なげ)いた。
奥州の風致は雄にしてみたり。

【12日目:明治41年9月6日】
畜産事務所

畜産事務所において行われた青年会で、春汀と桂月が講演した。
堺氏、高尾氏、若館氏、川崎氏など青年以外の人々も参加した。

【12日目:明治41年9月6日】
畜産学校
(現在の三本木農業恵拓高等学校)

校長の高尾角次郎氏の案内で学校に行き、精(く)くわしく説明を受けた。

【12日目:明治41年9月6日】
八戸 江渡(えと)旅館

宴を辞して馬車に乗ったのは12時頃。
八戸の町に入り、江渡旅館に案内された。
2次会が終わる、大島氏が帰った。
3次会は江渡旅館の板場。
江渡旅館の女将、浦山老人、川崎氏、桂月…
18戸に過ぎたものがある2つあり江渡の女将と浦山太郎兵衛の狂歌をつくる。
八戸 江渡旅館泊

【12日目:明治41年9月6日】
八戸 辰内邸(現八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【13日目:明治41年9月7日】
大久保氏の家

馬車に迎えられて、八戸大久保氏の家に着く。
敬待を受ける。浦山老人も来る。
泥酔して旅館に帰ったのは12時過ぎだった。
江渡旅館泊

【12日目:明治41年9月6日】
陸奥湊駅

辰内邸から湊駅へ。湊駅から乗合馬車に乗る。
桂月、百穂、川崎新兵衛氏の十和田からの一行3人ほかに、浦山氏、大島氏も乗る。
大島氏は前日十和田市まで迎えに来て、むなしく戻っていた。

【12日目:明治41年9月6日】
鮫湾 石田旅館

鮫湾第一の旅館石田旅館で休憩。
また馬車に乗り小中野の万葉亭へ行く。

【12日目:明治41年9月6日】
熊島 物見岩(ものみいわ)

鮫湾の人家が尽きるところで馬車を下り、物見岩を目指して歩く。
洋服姿の紳士、八戸町長北村氏、遠眼鏡を肩にかけてくる。
北村氏は、はちのへ新聞社長、その他30余りの長、八戸第一流の富豪。
(※物見岩は現在のタイイ牧場の近く)
眺望は実に雄大。
草ばかりの広く長い岡が海に突出しているのも珍しい。
東は太平洋に接し、南に樺市山(現増上岳)、西に十和田一帯の山、北に恐山一群の山。
一望20万石の奥奥の野(おうとうのや)一帯(いちほう)の中に収まる。
日は沈み、夕暮れの雲が赤く染まり、十二夜の月は空にあら。思ひがけずに見た物見岩の大観、その眺望に驚いた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は南部支藩のあったところ。
人口2万。盛岡より、陸奥南部唯一の大都市。
新聞は「はちのへ新聞」「南部新報」の2つ。
三日町、六日町、二十日町など日数をあしった町名が多い。
辰内邸に着くと
浦山太郎兵衛氏
はちのへ新聞主筆 女鹿左衛門(めがさざり)氏
〃 取締役 大島藩三氏
奥南新聞社長 関野重三郎氏
印刷会社社長 浦山十五郎氏
書師 伊藤富三郎氏 が出迎えた。

【12日目:明治41年9月6日】
辰内邸(現在の八戸駅)

八戸は